



医療の現場アラカルト - Vol.12

スペイン語担当 0さん

医療通訳士として働くことは、私に大きな喜びを与えてくれる一方で、時に深い悲しさを感じる仕事でもあります。外国人として、患者さんの立場にならざるにはいられず、日本語が話せないまま異国の方で病気と向き合う外国人患者さんの姿に、かつての自分を重ねずにはいられないからです。私自身、日本に来たばかりの頃、言葉が分からず不安な思いを何度も経験しました。あれから35年が経ちました。

多くの人は、「少し日本語が話せれば医師や看護師の説明も理解できるだろう」と考えがちですが、現実はそう簡単ではありません。日本には約7万4千人のスペイン語話者が暮らしていますが、その約70%は日本語を十分に理解できていません。健康保険に加入していても、医療通訳サービスを利用できない人は少なくないのです。



医療通訳士として働くためには、医療に関する専門知識や用語の習得など、日々の学びが欠かせません。しかしその努力には大きな価値があります。他の人を助けることだけではなく、自分や家族を守る力にもつながるからです。

13年前、夫が脳卒中を患った際、通訳としての知識のおかげで症状にすぐ気づき、迷わず病院へ連れて行くことができました。担当医から「迅速な対応が命を救った」と言われ、治療とリハビリを経て、夫は6か月後に元の生活に戻ることができました。医療者との確かなコミュニケーションは、私たちにとって大きな支えでした。

今月のトピックス

第10回国際臨床医学会学術集会

12月6日、第10回国際臨床医学会学術集会が九州大学で開催されました。「未来に向けて皆で考える、多文化共生社会における国際医療」をテーマに、医師、看護師、助産師、企業関係者など、さまざまな立場からの発表や意見交換が行われました。



外国人患者の具体的な診療事例、海外での先進的な取り組み、受診者全体の傾向の変遷など、多岐にわたる話題が共有されました。精神科医療通訳に焦点を当てた連医師のシンポジウムや、中牟田センター長による発表もあり、医療通訳の役割と重要性を改めて考える機会となりました。

本学会を通じ、医療通訳は医療現場においてまだ十分に認知されているとは言えず、今後さらに周知を進めていく必要があることを実感しました。同時に、「質の高い医療通訳とは何か」「その実現のために何ができるのか」という原点に立ち返り、自身の業務を見つめ直す貴重な時間となりました。

また、多くの「モヤモヤ」をキーワードとした演題では二次元コードを用いたアンケートにより、聴講者も発表と同時に参加できる仕組みがあり、とても印象的でした。来年はさいたま市で開催予定のこと、また皆さまとお会いできることを楽しみにしています。

